

「創造都市・新潟」の取り組み

仲原 正治（クリエイティブ・ディレクター/都市活動家）

1. 新潟の歴史

新潟には信濃川と阿賀野川の二つの大きな川がある。江戸時代は長岡藩と新発田藩の二つに分かれていて、阿賀野川流域に「新発田藩沼垂（ぬったり）」、信濃川流域に「長岡藩新潟」の二つの湊があった。中世から、海の交流（日本海文化）が発達しており、北前船だけではなく、出雲から青森まで船は行き来し、朝鮮半島までもが文化圏だった。1631年の洪水により、沼垂湊は阿賀野川の本流が信濃川河口に合流して浅瀬となり港の機能が果たせなくなったため、新潟湊が物流の拠点として栄えてきた。

新潟市街地の道路は、河川とほぼ平行して道があり、それを結ぶ形で小路（こうじ）がある。これは江戸・明暦の時代(1650年代)に、白山神社から古町通りにかけて新しい町並みを作ったためだ。信濃川と平行に街を分断していたのが寺町堀(西堀)と片原堀(東堀)で、そこを結ぶ形で小路堀が設けられ、水運が盛んだった。現在、堀は埋め立てられ道路となっており、わかりやすい町並みになっている。

新潟は1858年の5ヶ国との修好通商条約締結の際、開港5港に選ばれていたが、実際には横浜に遅れること10年、1869年1月1日(旧暦明治元年11月19日)に開港した。1870年には関税事務を取り扱う「新潟運上所」(1872年に運上所は「税関」と改名された)が完成している。開港5都市(長崎・神戸・横浜・函館・新潟)で当時の庁舎が残っているのは新潟だけである。



(旧新潟税関)



(新潟市内の堀と道路の関係)

明治以降は、大洪水、戦争、地震などを乗り越え日本海側の中心都市として発達してきた。特に洪水は、1896年、97年と2度の大洪水が続いたため、大河津分水(河津村から日本海までの10km)を1927年に完成させ、それ以降は信濃川下流での洪水は減少した。その後、1972年に関屋分水路の完成により、信濃川の洪水はなくなった。阿賀野川地区では、

1948年に亀田郷地区の排水のために栗ノ木排水機場が完成し、排水環境が飛躍的に向上するなど、新潟では水との戦いが繰り返されていた。

第2次世界大戦時は、港湾、鉄道、豊富な電力があったこともあり工業生産の拡大があり、工業地帯が広がり近隣の村との合併も行われた。戦争末期にはアメリカ軍の機雷投下により港は機能を失った。市街地は広島、長崎、小倉とともに原爆目標になっていたため空爆による戦災被害は少なかった。

1955年10月1日の大火は台風22号にあおられ、焼失面積約25万㎡、被災世帯1,193世帯、被災者5,091人におよび、県庁、市役所など中心部を一夜にして焼き尽くした。火災後に「新潟市火災復興土地区画整理事業」計画がまとめられ、防火帯にふさわしい道路の骨格づくりと懸案であった東堀、西堀の埋め立てが行われ、現在の中心市街地の骨格になった。1964年6月16日に新潟市を襲った地震は、M7.5 震度5、液状化現象により鉄筋コンクリート4階建ての県営住宅(川岸町アパート)が傾き、国体にあわせて開通したばかりの昭和大橋の橋げたが落ち、新潟空港の滑走路が津波と液状化により冠水した。昭和石油新潟製油所から漏出したガソリンが燃え広がり、火は水上の油に燃え移って広がり周囲のタンクも誘爆炎上させ火災は12日間に渡って続いた。火災は周辺民家にも延焼し、全焼347棟、半焼6棟、被災347世帯、罹災者1407人となり、国内で起きたコンビナート火災としては史上最大のものだった。



(信濃川に架かる萬代橋(1929年築)新潟地震時も被害なし。)

2. 近年の新潟の産業

「新潟といえば」と尋ねると、コシヒカリ(米)と答える人が圧倒的に多い。また、日本酒と答える人の数も多い。実際に2005年の米の産出量は全国市町村中1位である。また、日本酒の生産量は、兵庫県、京都府に次いで3番目となっているが、兵庫の灘、京都の伏見という二大生産地とは異なり、新潟県内全域に造り酒屋が点在し、キレの良い個性ある日本酒を造ることで、全国のファンを喜ばせている。

しかし、市内総生産(2009年)のうちの第一産業が占める割合は1.3%と低く、第2次産業が17.4%、第3次産業が81.3%となっており、消費型の中心都市となっている。

そのため近年は、「田園型政令都市」を目指し、「食と花の都—日本—豊かでにぎわいのある大農業都市—」を将来像として描き、元気な農業の担い手の育成、地域資源の活用、豊かな自然の保護、環境にやさしい農業などに取り組んでいる

一方、物流では、新潟港の活性化を進めるため、中国、ロシア、韓国との日本海横断三角航路の外貿定期コンテナ航路を開拓し、釜山、天津、大連などへの定期便も就航している。

産業育成については、地場産業の活性化と企業誘致を進めるため企業立地促進法に基づく「新潟市・聖籠町企業立地促進基本計画」を策定し、「食品・バイオ関連産業」「航空機・自動車等機械・金属関連産業」「組込み・高度ITシステム関連産業」「港の活性化につながる産業」の4業種に対して支援を行うこととしている。

市は、1996年に中核市に移行し、2005年に近隣13市町村と合併。人口は80万人を超え（2012年12月現在の新潟市人口803,490人、面積約726k㎡）、2007年に政令指定都市（現在全国で20都市）となり、県とほぼ同等の権限を持つようになった。

現在の課題のひとつは、2014年北陸新幹線開通である。北陸新幹線は、長野経由で金沢に至る路線なので、ほくほく線や北陸本線、新幹線の利用客が減り、金沢方面に観光客が流れていくことが予想される。新潟は、政令指定都市として産業の育成・誘致、農業の振興など数々の問題に取り組み、日本海側第一の都市としての位置を確かにしてきたが、今後は都市の個性づくりや観光振興による地域の活性化を進めていくが必要となっている。

3. 新潟市文化創造都市ビジョンとユネスコ「創造都市ネットワーク」

新潟市は、2012年3月に「新潟市文化創造都市ビジョン」を発表している。このビジョンの理念は「文化芸術が有する創造性を活かしてまちづくりを進め、市民がいきいきと暮らし、将来にわたってまちが活性化する新潟市をめざします。」としている。基本方針は「文化芸術の振興」、「新潟文化の個性と多様性の伸長」、「文化を活かした創造都市の実現」の三つである。

「文化芸術の振興」では、市民が主体の文化創造と文化を次世代につなぐため誰でもが参加できること、子どもの理解醸成、文化施設の在り方や連携、大学他関係機関の連携を掲げている。

「新潟文化の個性と多様性の伸長」では、港町の歴史や自然や景観なども文化としてとらえ、伝統芸能の継承や市民協働のまちづくりを進める中で、文化による生活の潤いを実現させ、「新潟市らしさ」を深め、広げることを目指している。

「文化を活かした創造都市の実現」では、創造性による都市の成長、持続的な発展を目指し、文化芸術の創造性を産業・観光・教育・福祉などに活かしていくこととしている。

具体的には「食を活かしたまちづくり、食文化の発信」「水と土の文化創造」「文化施設の在り方と役割、施設間の連携強化」「マンガ・アニメを活かしたまちづくり」「文化を活かした産業・観光の振興と交流の促進」「音楽・舞台芸術による創造活動」の6つを主な取り組みと位置づけ、事業を展開している。

<http://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/bunkagyousei/vision.html>

特に、「食を活かしたまちづくり」では、2005年から毎年開催している「食と花の世界フォーラムにいがた」は、広域合併を機に、産・学・官・民が一体となって、新潟の特徴である「食」と「花」を全国に発信している。新潟は豊かな自然を背景に「農業・畜産・水産」を基盤とした第一次産業が盛んで、日本の食糧供給基地として重要な役割を担っている。また、それを基本に米菓産業、水産加工、醸造産業など食品加工産業が産業構造の中で大きな位置を占めている。一方で、古くから優れた栽培技術に培われたチューリップをはじめとする花き園芸産地でもあり、米作りの歴史、地域の素材を活かした伝統食、酒を中心とした醸造・発酵産業が根づいていることもあり、ユネスコの創造都市ネットワーク(食文化—ガストロノミー)の認定を目指している。

4. 「水と土の芸術祭」の実施

21世紀に入り、日本は成長期から衰退期になり、今までの資本主義経済のシステムが行き詰まりGNPは世界3位に落ちた。失業する若者が多く貧困層も増え、少子高齢化のスピードは速く、人口減少も加速的に進むことが予想されるなど社会的問題が大きくクローズアップされている。また、都市に人口が集中するとともに、効率性ばかりが尊重され、過当な競争に身をさらされ、毎年3万人もの人が自殺する時代になってしまった。地域のコミュニティは崩壊し、人を大切にすること自体が難しくなっている。自治体は財政問題で悩み、中心市街地の衰退は目を覆うばかりの状況だ。

しかし、都市は都市だけで成り立つものではなく、流通にしても文化にしても農村とは切っても切れない関係がある。人材については、農村部や地方から都心部に集まり、彼らが日本を動かしてきた。農村部では都市部よりも少子高齢化が進み、山林田畑の荒廃、働き手の不足、空き家の増加、高齢者の移動手段の欠如、地域のコミュニティの希薄化など多くの課題を抱えている。

こうした中で、市民ひとり一人が地域の課題、地球環境の問題などに対して創造的で自由な活動を通じて、持続可能な社会を目指していく「創造都市」という考え方を取り入れる自治体が増えてきている。金沢市、横浜市などではアーティストやクリエイターの創造的な活動を推進することで地域の個性を伸ばし、都市の魅力づくりを行い、成果をあげてきた。

新潟市は都市の悩みと農村の悩みを同時に抱える自治体である。特に市町村合併後は、地域格差や地域コミュニティの希薄化が大きな問題となっている。今後は都市の個性づくりを進め、地域コミュニティの醸成や観光振興により地域の活性化を進めていくことが、必要となっている。

新潟市で創造都市のまちづくりを進めるうえで、2000年に近隣の妻有地域で始まった「大地の芸術祭」は今後のまちの個性づくりや魅力づくりに大いに参考になったものとして注目された。過疎の農山村での芸術祭では、コミュニティ能力の高いアーティスト等が地域

に入ることによって、地域の再生や産業の育成、就業の場の創出、観光産業の発達など大きな成果を作り出している。

市では、2009年から「水と土の芸術祭」を始めた。これは広域化した新潟市において、各市町村の歴史や魅力を発見することにより、地域間の交流を図るとともに、新潟の魅力を全国に知ってもらうことを目的としている。



(水と土の芸術祭 2009 ラム・カツィール作
「Funauta」)

2009年の1回目では、市内50か所に61人のアーティストが参加し、サポーターも700人を超え、1万人を超える地域の方々が参加した。広域で合併した市町村間の交流を含め市外県外からの観光客など約55万人の集客を数えた。この結果、新潟市の風土、歴史、魅力を伝えるとともに、自分たちも歴史や風土を知ることになった。<http://www.mizu-tsuchi.jp/>

2012年には第2回目の「水と土の芸術祭」が「転換点」をテーマに開催された。2011年の東日本大震災・原発事故を通して、自然とのかかわり、生き方を根底から深く問い直すことをテーマとして掲げている。この芸術祭はアート、市民プロジェクト、シンポジウムの三つのプログラムを中心に進められた。アートでは、59人・グループが66の作品を48か所の会場に設置し約50万人の来場者があった。市民プロジェクトでは132の事業に10万人以上が参加。シンポジウムでは「みずっち学校」を含め12回開催され3400人が参加し、全体では、61万人余の来場者を数えた。有料施設・有料イベント入場者数は13万7,400人となり1回目の入場者を超えている。



(水と土の芸術祭 2012 大友良英+飴屋法水たち作)



(水と土の芸術祭 2012年王文志作
—市民と共同制作)

5. 新潟市の中心市街地の魅力

新潟市は北前船の寄港地として栄えた湊町で、2019年に開港150年を迎える。約726km²と広大な新潟市だが、その中心市街地は、新潟駅から古町地区周辺だ。日本一の河川、信濃川を挟んで両岸に中心市街地があり、かつては町のいたるところを巡っていた堀には荷を積んだ船が行き交い、商人の町としても栄えていた。現在も当時の名残を感じさせる



洋館や料亭、新潟花柳界、回船問屋の住まいなどが残されており、街の散策も楽しい。

新潟の中心市街地はどこかと聞くと、ほとんどの人が「古町（ふるまち）」と答える。古町にはデパートが1軒だけ残っている。昔は丸大百貨店、小林百貨店(現：新潟三越)、新潟大和の3つのデパートがあったが、2010年に新潟大和が撤退してから、三越だけとなった。旧新潟市役所跡地に建つ再開発ビル「NEXT21」には原宿ラフォーレが入居しているが、若者は買い物には古町近辺よりも、伊勢丹をはじめ、

LOFT、若者ファッションの専門店などが商業集積している万代地区に集まるようになっていく。海側の万代島にはコンベンション施設の朱鷺メッセや県立美術館、佐渡航路等の乗り場がある。朱鷺メッセの目の前にある旧水揚げ場では「水と土の芸術祭2012」が開催された。

古町周辺は今でも「古町芸妓（げいぎ）」を擁する歓楽街を抱えている。古町近辺はオフィスビルが多いこともあり、飲食店、居酒屋がたくさん軒を連ねている。古町通りを中心に西堀通り、東堀通りに飲食店が並び、それを結ぶ小路に入ると思いがけない居酒屋がある。「フルマチ酒サロンマップ」を片手に居酒屋を廻ると、どこの店でも肴が種類豊富で新鮮でうまい。季節的には夏の茶豆、冬の魚介類は最高だ。日本酒も日本一と言われる。新潟は日本一の居酒屋文化を抱えていると言っても過言ではない。ユネスコの創造都市ネットワーク(食文化—ガストロノミー)の認定を目指しているが、食材や加工品だけではなく、居酒屋文化も大いに評価されるべきではないだろうか。



古町商店街には郷土の漫画家水島新司の「ドカベン」「あぶさん」などの銅像が並び、マンガ・アニメ専門学校もありマンガ・アニメの町を思わせる商店街となっている。路上ではジャズの演奏会なども開かれていて、賑わいづくりも進めている。



(古町で行われている「ジャズストリート」)



(アニメの町を象徴するドカベンに登場するキャラクター像)

古町通りから白山神社に向かうと上古町（かみふるまち）がある。若者向けのファッション系の店や飲食店、美容院など新しい店と骨董店、麴屋、老舗の和菓子店などがあり。それがうまくミックスされている。まだ空き店舗もあり、若い人が起業するには絶好の場所になっている。むろんチェーン店はない。数年前までは上古町の間地点に「ワタミチ」（旧渡道酒店）という写真やデッサンの教室、ワークショップなどで利用したり貸し出したりしていたスペースがあった。現在は「hickry03 travelers」というTシャツや雑貨のデザインショップになっている。ここがいわば、上古町の若者文化の原点であり、現在も情報地図「カミフルチャンネル」（路上のボックスに入れてあり誰でも持って行ける）の編集や芸術関係の情報拠点となっている。2階にはギャラリーもある。こうした町のイメージづくりは自然に発生したのではない。2004年に地元で「上古町まちづくり推進協議会」を立ち上げ、地道に若い人を育ててきた努力が少しずつ実ってきている。

上古町の先には能舞台も備えた劇場「りゅうとぴあ」があり、舞踏家・振付家の金森譲が舞踏部門のプロデュースを行っていて、新潟のコンサートやダンスの中心地ともなっている。

6. 終わりに

新潟市は豊かな食材や日本酒、加工品などを抱える日本でも有数な「食のまち」だ。その象徴的な形として、ユネスコ「創造都市ネットワーク（食文化—ガストロノミー）」の認定を目指して、食の分野で様々な掘り起こしをしている。また、地域の活性化、観光産業の振興を進めるために「水と土の芸術祭」や季節ごとに地域に根ざしたイベントや伝統芸能等の行事が行われている。こうした事業の推進や古くからの歴史や小路を中心とした街

並みを大切にした動き、そして、日常的な米作りや水産、工業、観光、サービスなどを進める中で、市民の心にクリエイティブなマインドが醸成し、自分の町を誇りに思うようになる。そうしたことの一つひとつの積み重ねが、持続可能な都市「創造都市・新潟」への道であると思う。「新潟市文化創造都市ビジョン」に掲げられた内容が花開く 2019 年の開港 150 周年の時期には、日本でも有数な「創造都市・新潟」になっていると思う。